
『通り雨』【掌編・文学】

山田文公社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『通り雨』【掌編・文学】

【Zコード】

Z9981Q

【作者名】

山田文公社

【あらすじ】

焦げたフライパンから煙が上がっていた。椅子に座った女は、ぼうつとした表情でそれを見つめている。やがてフライパンから白い煙がもうもうと上がり、フライパンから火が上がった。部屋中焦げた匂いが充満し、やがて火災警報機がけたたましく鳴り響いた。

それが全ての始まりだった。

焦げたフライパンから煙が上がっていた。椅子に座った女は、ぼうとした表情でそれを見つめている。やがてフライパンから白い煙がもうもうと上がり、フライパンから火が上がった。部屋中焦げた匂いが充満し、やがて火災警報機がけたましく鳴り響いた。しばらくすると玄関を叩く音と、ドアチャイムが鳴り響く。しかし女は無表情のまま椅子に座り、正面を向いたまま微動だにしなかつた。そしてドアが開くと、消化器を手にしたマンションの管理人が火元を探し始めた。付き添いの住人が焦点の定まらない女を見つけた。

「大丈夫ですか？！」

大声で尋ねられても全く反応せず、ただ、ぼうとしたまま焦点の定まらない目で宙を見ていた。

「しつかりしてください！」

女性住人は彼女の肩を持ち揺さぶるのだが、やはり視点は宙に浮いたままで、いつこうに反応する様子はなかつた。一方の管理人は火元であるガスコンロを止めて、燃えているフライパンへ蓋をして窓を開けて換気し始める。

「燃え広がってはいなかつたけど、ちょっと増島さん！」

そう言い管理人は食卓に座っているこの部屋の住人である、増島佐恵子ますじ さえこに呼びかけたが、未だに反応はなかつた。

「どうしよう？ 全然反応がないんだけど」

増島を声をかけ続けていた、二つとなりの住人、川原えつ（かわはら えつ）は心配そうに、振り返り管理人へ尋ねた。

「全然反応がないんです、どうしましょう？」

「ちょっと！ 増島さん！」

管理人は慌てて、佐恵子の両肩をゆさぶつてみたが、全く反応がなかつた。しかたなく管理人は救急車を呼び増島を病院へと連れて行く事にした。当然到着した救急隊員も佐恵子の反応を確かめたが、やはり全く反応を示すことはなかつた。

そして検査の結果が出た。管理人は佐恵子の主人である、^{ますじました}増島卓夫^{くお}を呼び出していた。慌ててやつて来た卓夫は医師から佐恵子の症状を聞かされた。

「火事における外傷は見つかりませんでした……ですが、CTの結果、脳に幾つか特徴的な脳斑が散見されました。これがCTの画像ですが、ここにここと……あと、ここにも、かなり多くの脳斑が確認されました。非常に申し上げにくいのですが、佐恵子さんは『若年性健忘症』である疑いが濃厚です」

医師の言葉に卓夫はついて行けずに、もう一度尋ねると、医師はゆっくり答えた。

「つまりボケです」

飲み込めずにわたしは再度尋ねた

「妻は……ボケているんですか？」

すると無情にも宣言した。

「ええ、そうなります」

突然の宣告にうなだれる卓夫をに医師は続けた。

「早発性で進行も急性で、しかも広範囲ですから、おそらく介護なしでの生活は厳しいかと思います」

「もう、治らないんですか？」

卓夫はすがりつくように医師の肩を掴んだ。

「残念ながら……今の医学ではどうしようもできないです」

その言葉に卓夫は肩を落として、うつむき狼狽え始めた。その様子を見て医師は氣休めとしりながら付け加えた。

「ただ、若年性健忘でも回復された方もいらっしゃいますし、一概には言えません」

「治る……事もあるんですか？」

「非常に希ですが、そういうた可能性はあります。まだ若いですし……」

その言葉に卓夫は何か自分に言い聞かすよつに頷いた。

卓夫は佐恵子を自宅へと連れて帰り、これからどうやつて生活していくかを考えた。今まで卓夫は家の事は全て佐恵子に任せきりだから、家事はほぼ出来なかつた。毎日不慣れな家事をして、佐恵子の世話ををして、そして多忙な会社へと向かう、そんな卓夫は徐々に精神的にすり減つていつた。

ある日卓夫が帰つて玄関を開けると異臭が漂つていた。糞尿の匂いだつた。特有の不快な匂いが居間から匂つてきていた。卓夫は佐恵子が漏らした程度に考えていたが、それは間違つていた。居間の壁一面は茶色く染まつていた。壁に糞便をなすりつけながら笑う佐恵子がいた。今まで怒鳴る事も手をあげる事すらしなかつた卓夫は、その出来事で頭に血が上り、怒鳴り散らした上に佐恵子の頬を思いつきり殴りつけていた。

「ふざけるな！」

卓夫は容赦なく倒れた佐恵子を足蹴にしながら、壁を見て咆吼をあげるようい叫んだ。そして芋虫の用に丸まつて怯える佐恵子に食卓の椅子を投げつけて、さらに怒鳴り散らした。

「クソ！ クソ！ クソ！」

佐恵子はさらに怯えて喚き始めると、卓夫は佐恵子の腕を引っ張り風呂場へ押し込めるとシャワーを浴びせかけ、体についている糞便を流し始めた。逃げようとする佐恵子を蹴り、あるいは殴りつけて、シャワーわかけ続けた。

それが終わると卓夫はバケツにお湯と洗剤とタオルを持って、ゴム手袋をはめて壁を拭き始めた。佐恵子の糞便がついた壁を拭きな

がら卓夫は泣いた。全てが吹き終わると卓夫は疲れ果てて眠りについた。

目が覚めると異常な笑い声が聞こえた。それはいつも同じように発作のように深夜になると笑う佐恵子の声だった。深いため息が卓夫から漏れた。卓夫はもう限界を感じていた。これ以上自分一人では無理だと感じた。

後日卓夫は自分と妻の両親にお願いした。返事は良いもので安心していた。しかし佐恵子の奇行を見るたびに卓夫に電話が入り、そして徐々に両親は近付かなくなり、やがて以前と同じように卓夫だけになってしまった。

居間で食事をとりながら、向かいに座る佐恵子を見て、卓夫は咳いた。

「いつそ2人で死ねるか、お前を殺せるなら、もうどれだけ楽だろうか」

無表情で座り、口を開けたままの佐恵子を見て、卓夫は頭を抱えた。どうにもならない事をいろいろと考えた。だがそのどれもが、どうにもならない事を悟っている。

「佐恵子……俺はずっと一緒にいるからな……」

卓夫は焦点の定まらない佐恵子の頬をそつと撫でた。『もう自分の声は佐恵子には届いてはいない』と、卓夫は知っている。けれど卓夫は構わずに抱きしめた。胸に抱いた卓夫は気づかなかつた。佐恵子の左目から一滴の涙が伝い落ちるのを、その言葉は微かに届いた事を……。

翌朝起きると、食卓には朝食が並べられていた。どれも不器用な作りではあつたが、たしかにそれは以前、佐恵子がよく作ってくれた朝食だつた。

「佐恵子？」

卓夫は当たりをつけがつたが、どこにも佐恵子はいなかつた。そ

して食卓の脇に置かれたチラシに気づく、それはとても酷い字だが、卓夫にはその文字が読めた。そこにはハッキリと『さよなら』と書かれていた。

卓夫は玄関から飛び出して、マンションの階段の踊り場から階下を見ると、そこに見慣れた白いワンピースのドレスが地面に横たわっていた。

「嘘だろ……」

卓夫は階段を駆け下りると、倒れている佐恵子を抱き上げた。

「おい、起きる……なあ、『ご飯冷めるぞ、おこ起きる、起きるよー！』

！」

揺ゆぶつても、ペクリとも反応することはなかつた。

「うあああ……！！」

卓夫は動かなくなつた佐恵子にすがりついた。突然降り始めた雨が、辺りのアスファルトを一瞬で黒く染めあげた。

雨音を響かせながら雨はいつまでも降り続いた。いつまでも。

(後書き)

お読み頂もありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9981q/>

『通り雨』【掌編・文学】

2011年2月18日01時55分発行